

<エッセイ>長い文章の書き方

藤倉, 良 / Fujikura, Ryo

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei Journal of Sustainability Studies / 人間環境論集

(巻 / Volume)

22

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

37

(発行年 / Year)

2021-10-30

長い文章の書き方

藤倉 良

1. はじめに

大学生生活も後半に入ると論文を書くはめになる、じゃなくて、論文を書く機会に巡り合う人も多いでしょう。懸賞論文や卒業論文です。大学院に進学した人ならば論文を書かないと学位はもらえません。けれども、それまでに長い文章を書いたことがない人は、いきなり書けといわれても何をどう書いたら良いのかわからず、困ってしまいます。

ネットで「レポート」や「論文」、「書き方」などで検索すれば親切な解説文や本がわんさか出てきます。でも、多くは全くの初心者向きとは言えず、ある程度、文章を書いた経験のある人を対象にしているものが多いようです。イチから手ほどきしてくれるサイトはあまり見当たりません。

ここでは、そうした長文ビギナーの人を読者に想定して、文章の書き方を紹介します。

2. 何を書くか

最初に決めないといけないのは、もちろん何を書くかです。テーマですね。

この文章のようなエッセイならばともかく、論文の場合にはこれが一番難しい。沢山の資料を読んで、それなりにいろいろなことを理解したつもりでも、

テーマは何にするかで立ち止まってしまうことがよくあります。何を書くかが決まりさえすれば、論文の3分の1はできたようなものです。修士課程でも、テーマ探しに何か月もかかってしまう学生は普通にいます。1年考えても決まらない人もいます。

ここではテーマの探し方についての話はしません。私は修士課程の学生には、鹿島茂著『勝つための論文の書き方』（文春新書）を一読することをお勧めしています。面識はないですが著者の鹿島茂先生は共立女子大学文芸学部の教授をしておられた文学者で、大学で卒業論文の指導をされていた経験をもとに、テーマの見つけ方や書き方をこの本で指南しておられます。

テーマにはオリジナリティがなければいけません。どれほど、ささいなことでも良いのですが、他の人がまだどこにも書いていないことがテーマになります。どこかに書いてあることをまとめることは勉強になりますし、論文を書く材料集めという意味でも欠かせません。でも、それだけでは報告書にはなっても論文とは言えません。

とても大きな例をあげましょう。気候科学の集大成はIPCC（気候変動に関する政府間パネル）という科学者の会合が作成する評価報告書です。3つの分科会のひとつ第一分科会から第6次評価報告書（AR6）が2021年8月に公表されました。66カ国の政府から推薦された200人を超える専門家が第5次評価報告書の刊行以降に発表された14,000本の学術論文を精査して、内容をとりまとめたものです⁽¹⁾（江守 2021）。

だから厳密に言えば、AR6にはオリジナリティはないと言えるかもしれません。オリジナリティがあるのは参照された14,000本の学術論文の方です。もちろん、AR6はそれ自体が大変な学術的貢献で、これから行われる無数の温暖化研究がAR6を出発点にすることになります。AR6の政策過程やその内容を精密に追って、そこから新しい真実や考え方を得ることができればオリジナリティのある論文となるでしょう。ここで言いたいのは、あるものを集めるだけではだめで、そこから何か新しい発見や考え方を見つけ出せるかどうか論文になるかそうでないかの分かれ目だということです。

研究者の評価は、書いた論文の質と量で決まるので、上を目指す人たちは、日

夜、論文のテーマを探し続けています（藤倉 2005）。でも、卒業論文レベルであれば、身近なところからテーマを見つけることができます。小学校の夏休み自由研究で、何をどうして良いか困ったことのある人は少なくありません。私もその一人でした。それでも、プロの研究者も感心するほどオリジナリティに富んだ研究発表をする生徒もいます。要は筆者の注意力と工夫なのでしょう。

ずいぶん前になりますが2006年の人間環境論集に「研究をするということ」というエッセイを書いて、研究テーマの見つけ方の例を示しました（藤倉 2006）。法政大学図書館のリポジトリから無料でダウンロードできます。参考にしてください。

3. どのように書くか

テーマが決まったら、いよいよ執筆作業です。けれども、パソコンに向かって、なかなか筆（カーソル）が進まないことはよくあることです。どのように始めたら良いのでしょうか。

一番効果的なのは、他の人が書いた論文を読むことです。数多く読めば、論文のスタイルというものがわかってきます。論文のスタイルや「お作法」というものは、学術分野によって多少は違いますが、だいたい次のような形に収まっています。英文論文でも同様です。

文頭にあるのはタイトルです。文頭にあるからといって、筆者がそれを最初に書いたかどうかは別です。書きあがった論文を全部読みなおして、あるいは先生などのご意見も頂いて、最後に決まることも珍しくありません。

重要なことは1行か2行で内容の想像がつくものにするということです。他の人がその論文を読もうか止めようかはタイトルで判断されるからです。タイトルの下に副題をつける人もいます。それは良いのですが、時々、妙に長い副題をつける人がいます。簡潔にするように心がけましょう。

次に著者名と所属を書きます。卒業論文ならば所属は明らかなので不要かもしれませんが、氏名は忘れないように。

卒業論文ではありえないかもしれませんが、学術論文や懸賞論文では著者が複

数並ぶ連名論文が普通にあります。理工系や医学系では昔から連名が当たり前でした⁽²⁾。複数の研究者や学生が協力して研究を行うので、当然、そうなります。一方で人文系や社会科学系では、以前は著者が一人だけの単名の論文が多かったのですが、経済学などの分野では連名論文が当たり前ようになってきました。大量のデータ処理や解析で共同作業が行われるようになったからでしょう。

学術論文の場合には、その次に数百字の要旨 (Abstract) と5つくらいのキーワードを入れなければいけません。本文を全部書き終わり、全体の内容が全部頭の中にきっちり納まった段階で書くのが望ましいでしょう。

そして、いよいよ本文が始まります。まずは、「はじめに (Introduction)」です。どのような背景があり、どのような理由で、どのような問題意識を持って、著者がこの論文を書くことになったかを書きます。先述の鹿島先生は、「この論文にはこんな面白いことが書かれているよ」と読者をひきつけるように書くのが良いと言われています。そのように書けるものであれば、そこから先の執筆も順調に進むでしょう。

「はじめに」の章末には、「本論文は……」のような書き出しから始まり、「まず……について示し、次に……を明らかにする。そして、……を述べ、最後に……を示す」というように、「はじめに」の章以降の構成を示すのが普通です。

本論文では、まず、先行研究の紹介に続いて研究の方法を示し、対象プロジェクトの概要とそれらに対して申し立てられた異議を示す。そして、どのような問題が生じていたのかを分析する。最後に、これらから共通に抽出しうるセーフガード実施上の課題と教訓を示す。

辻・藤倉 (2016) より抜粋

次の章は「目的 (Objectives)」です。「はじめに」で述べられる場合もありますが、章を別にして、この論文で何を明らかにするのかを述べます。

それから「方法 (Method)」です。理系の場合には欠かせません。実験系であれば、どのような装置や試薬をどのような条件で行ったのかを明記します。その実験を別の人が同じ条件で行えば同じ結果が出せるように書かなければいけませ

ん⁽³⁾。

文系の場合には理系ほど「方法」の重要性は問われないかもしれませんが、アンケート調査であれば、どのような形式で誰を対象にいつ実施したかはここで書くべきでしょう。ヒアリング調査も同様です。統計データを解析する研究であればデータの出所でしょう。文献調査だけで行う研究もありますが、その場合も「方法」の章として独立させなくても、どこかでそのことを書かないといけません。どのように研究が行われたかを書きます。

次に「結果 (Results)」です。この章が論文全体の肝になります。前章の「方法」に従って調査研究した結果、何がわかったのかを正確に、かつ要領よく書きます。

最後は「結論 (Conclusion)」です。結果を受けて、何が明らかになり、そこからどのようなことが言えるのか。どのようなオリジナルなことが明らかになったのかを記述します。「結果」と「結論」の間に「考察 (Discussion)」が入る場合もあります。「考察」と「結論」の切り分けはなかなか難しいのですが、「考察」には、得られた結果が持つ社会的な意義や、そこからどのような政策が考えられるか (政策的含意)、今後の研究課題などが書けるでしょう。

これで論文の主文は完結しますが、多くの場合、そのあとに「謝辞 (Acknowledgment)」が入ります。研究費が出ていればその出所を明示し、資金の提供元に対して、もらった研究費でちゃんと成果を上げられたという証拠にします。先生や先輩に有意義な指導をしてもらったり、仲間との議論が役に立ったり、研究に役立った資料を提供してもらったりしたら、氏名を書きます。アンケートやヒアリングなどに協力してくれた人々に謝意を示すこともあります。

本研究は JSPS 科研費 JP12345678 の助成を受けたものである。研究の実施にあたっては、飯田橋大学外堀梅蔵教授から貴重なご示唆を頂いた。ホウセイ食品株式会社からは社史など貴重な資料をご提供いただいた他、職員の方々にはアンケートやヒアリングにもご協力頂いた。ここに謝意を表する。

論文の本文はすべて「である」体で書きますが、謝辞だけは丁寧に「です」体

で書かれることもあります。

最後に欠かせないのが「参考文献 (References)」です。研究をするにあたって利用した情報はすべて漏らさず参考文献の欄に記入しなければなりません。

これが論文の標準的な章立てになりますが、必ずしもそのとおりにしなければならないというわけではありません。「はじめに」、「目的」、「方法」、「結果」、「結論」という表題でなければいけないというわけでもありません。けれども、論文というものは学問分野に関わらず、おおむねこの形式、つまり議論の筋道にそって書かれています。学術誌によっては、Introduction, Objectives, Method, Results, Discussion, Conclusion, References と明示された各章が全部書かかれていないと受理してくれないところもあります。その時に、Discussion と Conclusion をどう分けて書くべきか悩んだことが私にはありました。

4. 議論の流れ

このような流れで書けば、論旨も自ずから決まってくるようですが、そうならないこともあります。記述したい結果も一つとは限りません。複数のことがわかり、しかも、それぞれに重要そうだったりすることもあります。どれを取り上げるのか。複数とりあげたらどのような順序で話を進めるべきか迷うこともあります。

そうなったときのヒントとして、研究結果をプレゼンしてみることを勧めます。パワーポイントを使って、「はじめに」から「結論」までを15分くらいのプレゼンでまとめるのです。そうすることによって、必要なことや、省いても良いこと、省いた方が良いことがおのずと見えてきます。パワーポイントであれば、話の順番はスライドを移動するだけで変えられるので、良い議論の流れが見えてくるでしょう。ゼミ論文や卒業論文であれば、先生やゼミの仲間に見てもらって、意見をもらいましょう。自分以外の人が発表をどう受け止めてくれるかを知ることが大切なことです。

プレゼンをすると、論文の長さも見当がつきます。学問分野によって差がありますが、報告時間は理系の学会では長くても15分程度、社会科学系でも30分く

らいです（1時間たっぷり報告させる学会もあるようですが）。逆に言えば、この程度の情報量が1本の論文に盛れる分量ということになります。ちなみに、法政大学大学院公共政策研究科では修士論文審査会での報告時間は20分程度です。

卒業論文ではあまり起こる話ではないのですが、博士論文くらいになると、長年にわたる研究成果をなんでもかんでも全部博士論文に盛り込もうとする人がいます。丁寧に書こうとするあまり、「はじめに」や「結論」が長くなりすぎて、結局、なんだかわかりにくい論文になります。

テーマは一つに絞り込みましょう。「君はこの論文で何を言いたいのか?」と聞かれたときに1分以内で答えられるようにしましょう。研究に至った背景や関連情報、収集した原データなどは必要十分な量に絞り込みましょう。それでも長くなりそうときは、主題に直接影響しない関連情報は本文から切り離して、脚注にするか、巻末に付録として掲載しましょう⁽⁴⁾。

殆どの学術誌は長さの上限を決めています⁽⁵⁾。環境科学会は文理総合の学会ですが、ここが出版する和文誌はB5版の仕上がりで8ページが上限です。それを超えると1ページにつき15,000円の超過料金を取られます。社会科学系の論文の場合1万字から2万字が上限のところが多いのではないのでしょうか。A4で10~20ページというところでしょう。逆に言えば、それだけの長さがあれば、どれほどの大研究であっても内容は十分に伝えられるということですよ⁽⁶⁾。

5. 文章を書く

さて、ひとつのパラグラフはどのくらいの長さが適当でしょうか。文章の種類にもよりますし、執筆者にも、学問分野にもよります。

それぞれのパラグラフで一つの内容が完結しなければいけないという人もいて、そういう人が書くパラグラフは長くなりがちです。1ページに改行が一度もないということもあります。

逆に長いパラグラフは読みにくいからと、読みやすさを重視して数行で改行する人もいます。私はそちらに属するようですね。

パラグラフに長短はあっても、それぞれのパラグラフで言いたいことは先に書

く方が良さそうです。結論が先、理由は後です。「○○である。それはこうだからだ」という形で、英語なら because でつながる論理展開です。逆に「これはこうで、あれはそうだ。だから○○だ」という、therefore でつながる形にすると、そのパラグラフを最後まで読まないで、何を言いたいのかが後までわかりません。

そして、とても重要なことは、改行したら、次のパラグラフの冒頭は1文字下げることです。原稿用紙に鉛筆で文字を埋めていた私の世代に属する人は、小学生のときから叩き込まれた「常識」なので、自然にそうする習慣がついています。でも、最近の人にはそうでない人が多いようです。ネット・ニュースも1文字下げる代わりに、1行空けて次のパラグラフを始めています。それでも同じニュースが紙の上に乗るときには必ず1文字下げられています⁽⁷⁾。改行したら必ず1文字下げてください。

論文とは関係ないかもしれませんが、会話文では、ひとつの発言は長さに関わらず一つのパラグラフにすることが多いようです。この場合には文頭でも1文字は下げません。

クリスティン・フィグナーがニカラグアのような貧しい国ではコカ・コーラのような大企業が廃棄物管理の責任を負うべきだという話を始めたので、ちょっとした論争になった。

「政情が不安定な場合に、ゴミ処理は誰がしますか」

「政府が機能していなければならぬのは明らかだね」

「ニカラグアが良い例ですよ。どれだけ政権交代がありました？ アフリカの国で何回政権交代しました？ あなたはいつも政府の責任にしがりますけど、貧しい国の政治状況は安定していないことが多いし」

「じゃあ、廃棄物管理を一本化するんじゃなく、それぞれの会社にやらせるというわけ？」

Shellenberger (2020) の一部を翻訳

ついでに言うと、会話文の終わりの「かぎ括弧」の前では句点(。)はつけない

いのが習慣のようです。

6. 図表をむやみに入れない

論文は論「文」ですから、文章が中心です。しかし、文章だけでは十分に意を尽くせない場合があるので、その時は図や表を挿入します。図表はあくまでも補助的な最小限のものです。

学生の原稿で散見されるのが、本文に何の説明もないまま貼り付けられている図表があることです。これはダメです。図表はあくまでも補足です。図表を貼り付けたら、「図2が示すように」とか「表1から明らかなのは」というように本文でそれが何を意味するのか、必ず説明してください。

図表には必ずタイトルをつけましょう。普通、タイトルは表では上に、図では下につけられるようです。これは習慣のようで、英文でも同様です。さらに、筆者が自分で作成した図表でなければ、後で述べるようにデータの出所も記載します。

7. 参考文献の引用

論文では、「はじめに」か、その次の章で先行研究を紹介しなければいけません。論文に書かれていることが100%筆者のオリジナル新発見であることはまずありません。誰かの研究成果や方法論の上に立って研究はなされるものです⁽⁸⁾。だから、これまでにどのような類似の研究がなされ、どのような方法論が用いられてきたかを漏らさずかつ簡潔に記述しなければなりません。とつても面倒な作業です。できることなら避けて通りたいですが、そうはいきません。下がその例です。

大分県の一村一品運動については、施策や量的分析、マーケティング、地域振興などの観点から様々な研究が行われてきた。孫（2010）は、施策を実証的に検討し、行政組織が政策を期待通りに展開するための戦略を示した。足立（2007）は、活動の成果を統計的に検証し、大矢野（2001・2002）は、活動が持続的に成長するためには、当該地域の経済発展が自然環境と社会水準の許容範囲内で行われなければならないことを数量分析的アプローチによって示した。吉田（2006）は地域産業に着目し、関連事業を結ぶキーパーソンの重要性を指摘している。猪爪（2006）は農産物直売所の成功による農村女性の内発性を示し、西川（2006）は地域資源をキーワードに国内外の事例を考察した。Adachi（2008）は一村一品運動のマーケティング面での特徴を明らかにしている。

向井・藤倉（2014）より抜粋

ここでは8本の論文が先行研究としてあげられています。

自分の研究結果や考えを述べる時も、自分で得た情報以外には必ず情報源を示さなければいけません。逆に言えば、引用文献が示されない箇所はすべて著者が発見したことであるとみなされます。

一村一品運動という名称から、一品目の生産を目指す活動と誤解されやすいが、活動が継続している事例からは、すべて複数の産品が生みだされている。ヒット商品は競合品や類似品の台頭を招き、個性的な特産品といえども寿命があり、いずれ売り上げは下向く（中小企業庁 2005）。その時に、既存の産品に頼らずに、新たなアイデアやサービスを地域の力で生みだし、市場に提供することが重要であり、そのために人づくりが不可欠なのである。

向井・藤倉（2014）より抜粋

下線部のことを述べているのは中小企業庁の報告書であり、筆者の見解ではありません。それ以外の部分がすべて筆者自身の考察結果ということになります。

このように、どこまでが先行研究で、どこからが筆者のオリジナルなのかがわかるように論文は書かなければいけません。

誘惑にかられるのはコピペです。楽して文字数を膨らませることができます。でも、法政大学にはコピペを見つけるソフトがあり、教員は自由に使うことができます。コピペすなわち「抜き書き」をする場合には必ず「括弧」でくくり、その直後などに出典を明記しなければいけません。書籍から抜き書きしたときは、(藤倉 2019, 34-35) のように該当するページ数も記入します⁽⁹⁾。長さも最小限に抑えましょう。あまりにコピペが多い論文は剽窃とみなされ却下されます。アメリカには剽窃が著しい論文やレポートを提出した学生には停学や退学という厳しい処分を科す大学もあるそうです。

同時に、ストックホルム会議は「発展途上国と先進国の“環境と開発”に関する考え方が真二つに分かれた」(橋本 1984) 会議でもあった。鈴木 (1982) は、開発途上国の人から日本の「経済発展が環境問題をひきおこしたとしてもやむを得ない必要悪であることは日本人も分かっているはずである。我々はもっと煙突がほしい。その気持ちを代弁してもらいたい」と訴えられたのである。橋本 (1981) は、開発途上国の環境問題は同会議で採択された国連人間環境宣言と「日本における環境問題の扱い方」との間には「本質的な相違」があり、環境と開発は不可分の関係であることを指摘している。

藤倉 (2017) より抜粋

どうしても長い文章を抜き書きしたいときには、パラグラフを別にして一段下げるなどの工夫が必要です。ただし、学術誌によっては一定の長さ以上の抜き書きを禁止しているところもあります。

しかし、その一方で、環境分野における日本の貢献は国際社会ではまだ評価されていなかった。橋本（1987）は次のように指摘している。

開発途上国の厳しい現実における環境保全と開発という具体的な事例について、日本が今日までどれだけ実質的に効果的な貢献をしてきたかということになると、未だ長年の経験と実績を積み重ねて来た欧米先進工業国群と較べてごく初歩的な段階にあり、日本はむしろ環境破壊に手を貸す資源の取奪者ではないかという批判の声の方が国際社会の間では強いことを認めなければなるまい。アメリカの国務省の国際的な環境施策の責任者は、日本大使館の環境担当書記官に対し、「日本は抽象的な一般的な原則論では積極的に貢献しているが、個別の具体的問題の対応となると全く消極的で役に立たない」というきびしい批判をあげたという。

藤倉（2017）より抜粋

文献引用の仕方は様々です。社会科学では上の例のように（著者 出版年）を文中に挿入することが多いようですが、[数字]や上付き数字で示す場合もあります。引用箇所をどう記載すべきかについても、ネットで検索すればたくさん出てきますから、そちらを参考にしてください。

そして、最後に引用した文献を列記します。学術誌に投稿する場合には表記法がしっかりと指定されています。文献を並べる順番は著者のアルファベット＋五十音順が多いのですが、本文に出てくる順番に番号を振り、その順に並べることもあります。

足立文彦（2007）「一村一品運動の統計的検証試論と事例の追加」2007年7月
金城学院大学人文・社会科学研究所紀要 第11号 pp.15-29

河合知子（2007）「農家生活から眼をそらした普及事業の結末」KS企画 HP
<http://www2.plala.or.jp/kskikaku/hukyujigyo.html>（アクセス 2013/06/18）

インターネットから情報を得た場合にはアクセスした年月日も記入します。

図表も右下に「出所：中小企業庁 2005」のように情報の出どころを明示します。100%筆者のオリジナルデータから作成した図表であれば「出所：筆者作成」となります。

8. 提出はゆとりを持って

論文が書きあがったら、さっさと提出してほっとしたいのは人情です。でも、待ってください。誤字や脱字がないかしっかり確かめてください。不慣れな人では「です・ます」と「である」が混在していることがよくあります。提出前に少なくとも1回、できれば2回以上見直すことをお勧めします。書きあがってから一晩以上寝かせて、次の日のリセットした頭で見直しするのが良いでしょう。勢いに任せて書きすぎたことがないか。思い込みで勝手に省略したことがないか確認しましょう。

本文で引用した文献がもれなく参考文献に記載されているか。逆に、参考文献にあるのに本文で引用されていないものはないかのチェックも重要です。何回も書き直しをしているうちに、どちらかがなくなってしまうことがあるのです。

卒業論文のように締切のある論文は要注意です。事前チェックしてもらおうと締切直前に先生に投げかけるのはNGです。先生にも都合があるし、チェックにはそれなりの手間と時間がかかります。チェックしていただいたものを修正する時間も必要です。大勢のゼミ生を持つ先生のところには締切日前には卒業論文が渋滞することもあります。それなりの余裕を持って見てもらうように心がけてください⁽¹⁰⁾。

9. おわりに

引用の仕方、参考文献の書き方など学術論文の形式は学問分野や学術誌によって異なります。でも、段落の最初の一字は下げるとか、特別な場合を除き「です・ます」「である」を統一するというような文章の書き方は変わりません。そうしたことを身に着けるには、たくさん読んで、たくさん書くしかありません。

習うより慣れろです。もしかしたら、このエッセイを読んでいる人はすでにそういう技術は身に着けているかもしれませんが、これからの論文やレポートの作成に少しでも役に立てばうれしいです。みなさんのこれからの努力に期待します。

謝 辞

本稿の作成にあたり東京大学名誉教授中山幹康先生から貴重なご意見を頂戴しました。御礼申し上げます。

《注》

- (1) 原稿は公開され、専門家から一般市民までのレビューアーによる査読が3回にわたって行われました。レビューアーから提出された意見は78,000件に上りましたが、執筆者たちはその全部のコメントに回答しました。コメントと回答もすべて公開されました。そして、政府代表が出席する会議で合意が得られて初めて最終版ができあがりました。
- (2) 著者の数は普通2、3人、多くても5、6人といったところですが、2011年に発表され、ノーベル賞が授賞されたヒッグス粒子発見の論文は2,149人の連名だそうです。どれだけのビッグ・プロジェクトだったのかをうかがうことができます。著者をどの順番で並べるかは当事者にとっては大問題です。貢献度の高い人から並べられるべきものなので、先頭に名前が載る「筆頭著者」にはそれだけの意味があります。
- (3) STAP細胞の論文は、複数の研究者が論文に書かれた条件で追試してみても結果が再現できなかったことから、信ぴょう性が疑われることになりました。
- (4) 学術誌によっては脚注を禁止するところもあります。一方で、脚注がたくさん入った論文もあります。「本当に面白いのは本文ではなくて脚注だ」と言い切る先生もいます。私は同意しませんが。脚注を入れるかどうかは、執筆者の好みの問題でもあります。
- (5) 大切なのは中身であって、長ければ良いというものではありません。ワトソンとクリックは1953年にネイチャー誌にDNAの構造解析結果を発表し、ノーベル賞を受賞しました。その論文は速報性を優先したために要点だけが記されたわずか1ページの速報論文でした。きちんとした形の論文は後から出されました。
- (6) 人間環境学部の研究会修了論文(卒業論文)は図表込みで16,000字以上となっています。この文章が脚注込みで約12,000字なので、その1.3倍以上ということです。
- (7) 英語の文章も同様です。パラグラフの先頭を少し下げると、下げないで1行空ける場合とがあります。
- (8) 論文専門の検索サイトであるGoogle Scholarの最初のページには「巨人の肩の上に立つ」とあります。それぞれの研究は巨人つまり多くの先人の研究成果の上に成り立っているという意味です。
- (9) 最近はキンドルのような電子書籍が増えてきて、ページ数をどう書いたら良いのかわからなくなってきました。
- (10) 大学院では修士論文や博士論文の提出が締切時刻を1分でも遅れるとアウトになります。締切日になってようやく原稿が完成したので、規定部数をコピーして提出しようと思ったら、共用のプリンターが激混みだったり、コピー機が紙詰まりをおこしたりして、時刻に間に合わず1年を棒に振ったという話も何度か聞いたことがあります。最近は電子ファイルの提出で済むようになったので、そのような「事件」も少なくなったのかも知れませんが。

参考文献

- Shellenberger, M. (2020) *Apocalypse Never*, Harper Collins Publishers, New York.
- 江守正多 (2021) 【速報版】IPCC 執筆者が独自解説！「気候変動 国連最新レポート」、
<https://www.youtube.com/watch?v=dLgGSI0G2SA> アクセス 2021 年 9 月 9 日
- 辻昌美、藤倉良 (2016) アジア開発銀行の住民移転政策実施上の課題 — 異議申立プロジェクトの事例分析、公共政策志林、第 4 号、117-134 頁
- 藤倉良 (2005) 論文を書くということ、人間環境論集、第 6 巻、第 1 号、81-87 頁
- 藤倉良 (2006) 研究をするということ、人間環境論集、第 6 巻、第 2 号、37-48 頁
- 藤倉良 (2017) 国際協力、環境研究、No. 182、100-105 頁
- 向井加奈子、藤倉良 (2014) 一村一品運動の継続を可能にする要因、公共政策志林、第 2 号、87-100 頁